

「戦地再訪」作品の資料調査——戦地再訪ブームと記録をめぐって

小島秋良 日本文化学分野・専門 博士後期課程2年

はじめに 1964年の海外渡航自由化以降、アジア・太平洋地域にある旧戦地への訪問が元兵士や遺族によって活発に行われてきた。このような戦地再訪ブームは遺骨収集や慰霊を目的としており、政府事業のほか戦友会などの団体や個人の旅行としても数多く取り組まれてきた。この再訪経験が帰国後、戦友会の行事報告や個人史の一部として、手記や回想録、日記、詩など様々な発表形態で書き残された。これらのうち本調査では書き手を元兵士に限定したものを「戦地再訪」作品とする。

再びかつての戦地を訪れることで生じる情動や現地の人々との再会は、戦争記憶の語りや継承、戦後のアジア地域との関係性を考える上でも重要である。しかし「戦地再訪」作品の大半が、自費出版や私家版であり市場に出回らなかったものも多い。本調査はこれらの作品の実態調査を行い、一般の人々による戦争の語り分析の土台作りにつなげるものである。なお、本調査は「靖国偕行文庫における「戦地再訪」作品の資料調査」として助成を受けたが、調査の過程で複数の資料館を利用したためタイトルを変更した。

調査概要 靖国偕行文庫、しょうけい館、昭和館、国会図書館に所蔵されている「戦地再訪」作品を調査した。なお、しょうけい館では学芸員の方のご協力を得て全ての図書を確認することができた。

調査結果・考察 調査期間中に確認できた218作品のうち、「戦地再訪」作品は114作品であった。再訪年代別では1970年代から増加し1980年代にピークを迎える【図1】。出版年代別に見ても1980年代が最も多く【図2】、これは自分史ブームにより自費出版が行いやすくなったことと、書き手が定年退職を迎えるなど自身の生活に一区切りつき、改めて戦争を振り返ることが可能になったためと考えられる。再訪地域別では、遺骨収集や慰霊事業の受け入れが東南アジアやオセアニアと比べて活発に行われたわけではない、中国の再訪作品も確認することができた【図3】。

「戦地再訪」作品では、再訪・出版年代の違いや、再訪地域の別にかかわらずかつての戦地で身体感覚に生じた異変の語りが共通して見られる。例えば山や戦友の顔が近づいてくる、声が聞こえるなどである。これらの現象の語りは、団体で再訪し複数人によって編集された作品では、現象を帰国後も参加者と共有、共感することを重視した書き方がされ、生者と死者だけでなく、生き残った者同士の結びつきも強化し呈示するものとなった。異変現象は慰霊の最中または直後に生じており、再訪者にとってこれらの現象から亡き戦友の存在を感じ、さらにはそれを書き残すことに意義があった。一方で、これらの現象を強調することは、現地の人々の被害を後退化してしまうことにもつながる。そこでは「喪の作業」としての戦争の語りの限界が見られるのだ。以上の考察は「「戦地再訪」作品に見る「傷」——戦地空間と身体への異変」(第55回国際研究集会「戦後日本の傷跡」2022年2月)で発表した。

また今回の調査で「戦地再訪」作品が、他の作品内でも引用、言及されている例を多数見つけた。自費出版であるため出版数が限られているにもかかわらず、「戦地再訪」作品のネットワークが存在していたと言える。すなわち書き手にとっては、同じような境遇の読者に読まれることを意識した語りを行うことになったのだ。

おわりに 「戦地再訪」作品は書き方の形式があるわけではなく、記述の多寡も作品によって異なる。そのため厳密な分類は不可能だが一つの傾向として今回の結果を示したい。また再訪経験を記録として残すだけでなく、詩や短歌、小説などの創作題材として使用している作品を発掘することができた。これらの作品分析を今後の課題としたい。

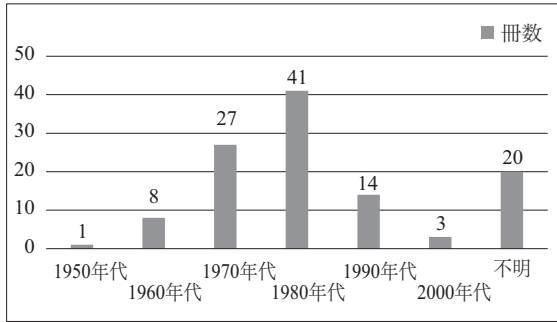


図1 再訪年代別

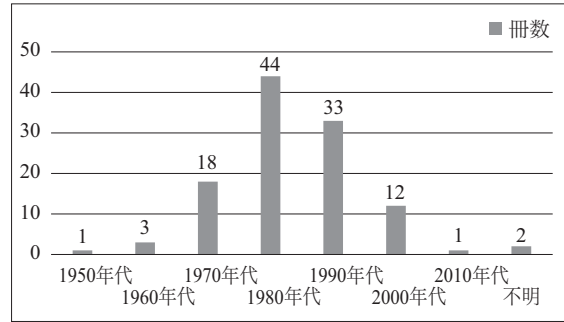


図2 出版年代別

※複数回訪問している場合は、最初に訪問した年で分類した。

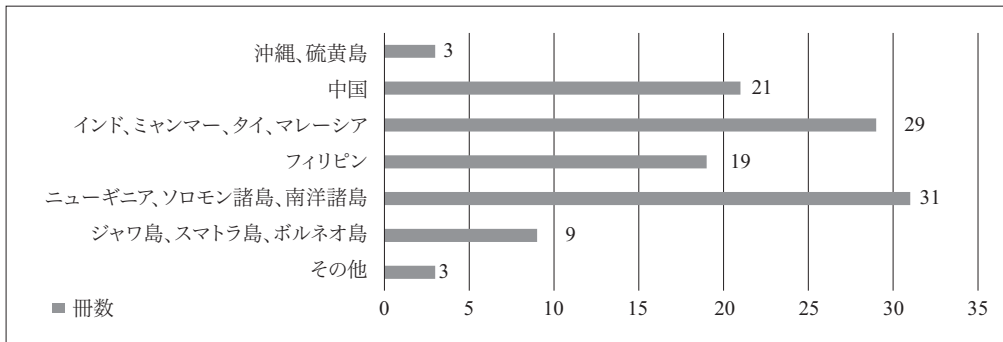


図3 再訪地域別

※複数の地域に跨る場合は、重複して集計した。